

3 支援活動の報告 (うきは市派遣職員)

3 支援活動の報告（うきは市派遣職員）

平成24年度にうきは市に派遣された本市職員による活動報告（9名）



写真位置：③⑥④⑧
⑤①⑦⑨②

	(派遣先)	(氏名)	(頁)
◆	うきは市派遣職員		
①	うきは市住環境建設課災害復旧対策室 (24/9/10～24/12/31)	藤丸 直樹 (土木)	132
②	うきは市住環境建設課災害復旧対策室 (24/9/10～24/12/31)	瀬戸嶋 誠 (土木)	136
③	うきは市住環境建設課災害復旧対策室 (24/9/10～24/12/31)	國武 亮 (土木)	140
④	うきは市住環境建設課災害復旧対策室 (24/9/10～24/12/31)	深川 弘明 (土木)	143
⑤	うきは市住環境建設課災害復旧対策室 (24/11/12～25/3/31)	中島 博文 (土木)	146
⑥	うきは市住環境建設課災害復旧対策室 (25/1/1～25/3/31)	石井 学 (土木)	149
⑦	うきは市住環境建設課災害復旧対策室 (25/1/1～25/3/31)	内村 政彦 (土木)	153
⑧	うきは市住環境建設課災害復旧対策室 (25/1/1～25/3/31)	岡本 実 (土木)	157
⑨	うきは市住環境建設課災害復旧対策室 (25/1/1～25/3/31)	鬼木 香尚 (土木)	161

九州北部豪雨災害支援報告

派遣先	うきは市住環境建設課災害復旧対策室
所属	建設局河川整備課
氏名	藤丸 直樹
活動期間	平成 24 年 9 月 10 日～平成 24 年 12 月 31 日
支援活動	災害査定

〔 派遣日当日 〕

うきは市吉井庁舎に朝到着し「今日から始まるのだ」と実感がわいてきた。自分がうきは市の復旧復興の力になれるのか、少しの不安もあったが、北九州支援メンバーは他に 3 人もいる。みんなで「がまだすぞ！」との思いで市庁舎に入った。

辞令交付を受け、3 階にある災害復旧対策室に案内された。公共災（道路・河川等）、農災、林災を担当する職員が慌しく作業をしている。うきは市の職員は 7 月上旬から連日連夜の業務で表情に疲れもみられた。自分も派遣前に数日間、所属の仕事の引継ぎ資料を深夜まで作成していたため、すでにフラフラの状態ですタートを切ることになる。体力が続くのか不安になった。

自分が担当する公共土木係（公共災）では 1 次査定が終わって、2 次査定の準備も進んでおり査定に関する事前の作業（現地調査、設計会社の決定、測量、現地写真撮影等）も進んでいた。派遣当日まで作業状況をまったく把握していなかったのですこし安心した。

北九州支援メンバー 4 人の主な作業内容は、設計会社が作成した査定図面のチェック及び図面の修正指示、査定設計書作成、変更設計書及び変更図面の作成を行うことになった。

以前行った災害査定は、ひとつの現場を設計から査定までを担当する様な作業とは異なり、完全分業制となった。多少の違和感があったが、約 200 箇所もの査定を受験するとなると効率の良い手法だったかもしれない。

早速、現地視察に行くこととなった。平地から山間部に向かって行くとだんだん景色が変わっていく。被災の状況は予想をはるかに超えるものだった。

右の写真の鹿狩川は、元の川幅が 1/3 程しかなく、小屋の基礎が仙窟され、母屋も床上浸水の被害にあった。（後に小屋共にすべて撤去され現在は更地になっている。）

写真の上流部では、元の河川の位置が分からないくらいに被害を受けていた。



鹿狩川



つづら川（つづら棚田）

日本棚田百選の「つづら棚田」も被災を受けており、この様な状況であるため観光客も殆どいなかった。調査当時は、彼岸花が田んぼの畔に綺麗に咲いていた。

昔から守り続けられた空石積みの棚田を復旧するのは容易ではない。精巧に積まれた空石積みの伝統技法を行う職人さんがいなくなりつつあるなかで、美しい農山村の原風景を取り戻すことが出来るのだろうか心配になった。



左の写真は、落橋した橋で生活道路が寸断されてしまっている。一日も早い復旧が望まれるが、橋梁災は本省協議が必要で非常に時間がかかる。

結局この橋梁の査定を受けたのは、自分の派遣期間が終わって年が明けた1月21日からの11次査定であった。

橋梁の復旧はこれからで、奥の家の住民の方はかなりの不自由な生活をされているであろう。

山口3号橋（市道山口線）

現場を目の当たりにすると、事前に見た写真や映像での被害状況とでは、九州北部豪雨の爪あととは想像できないレベルの被害という事を思い知らされた。

〔 災害査定 〕

うきは市の災害査定のスケジュールを見ると、ほぼ二週毎に災害査定を受けなければならない。査定の準備をしながら、次の査定の図面及び設計書作成をするハードな日程だ。

当初は10月までに査定を終了するようにとのお達しがあったようだが、査定件数をみても到底終わるものではない。その後12月まで延び、最終的には翌年の1月までとなった。

4次査定の査定図面のチェック及び設計会社へ図面修正指示から始める。二年前の災害査定を思い出しながら作業を進めるが、なかなか調子が出ない。災害査定の手引きと災害手帳を見ては図面の修正、設計書の作成の繰り返しだ。査定現場を見に行く暇も無く目論見書の提出となった。自分が担当した4次査定の結果は、自分自身が納得いくものではなかった。やはり時間が無くとも現場へ行き、現地の状況、被災のメカニズムを確認したうえで設計を行うべきだと実感した。

国交省や地方整備局の査定官、福岡財務の立会官が行う災害査定は、毎回違う人が査定をする。そのため毎回違う指示や指摘を受ける。また、うきは市をサポートしている久留米県土も査定が進むにつれ指示や指摘事項が増えてくる。自分たちもかなり苦労したが、毎回変わる指示に設計会社も大変だったと思う。

現地調査を行い、査定ごと違う指示や指摘に対応し、仕事のクオリティを上げるためには指定された期日までに仕事を終わらせるのに業務量が多すぎて、あっと言う間に一日が終わる。一日の時間がとても短く感じた。

毎日夜遅くまで、時には深夜や朝方まで仕事を行っていたが、北九州メンバーは派遣期間中に集中力を切らさずに支援活動を終えることができたと思う。

〔 コミュニケーション 〕

仕事が激務でも、気持ちが落ち込む事無く仕事が出来れば乗り越えられると思いき、みんなのモチベーションを上げ、業務の目的に向かっていけるようにと日々心がけていた。

北九州メンバーとは業務や生活面の問題点などの情報を共有するよう常にコミュニケーションを取り、うきは市への支援となる仕事が出来ようと考えていた。うきは市の職員は災害査定の業務に加え通常の業務も行い、休日も殆ど取ることなく働いているため、負担の軽減になるよう配慮を行い、時には、うきは市の若手職員の仕事の悩みを残業が終わった深夜や休日に聞いてあげたりすることもあった。うきは市、北九州市の職員関係なく一丸となって復旧復興に向けて全力を尽くす思いであった。

〔 健康管理 〕

支援に行き風邪や病気で休んでしまっは、支援の意味がない。健康管理は欠かせない。食事は最も大切だ。朝食、昼食の時間は取れるが、夕食の時間が取れなかった。仕事が終わる22時、23時以降に営業している飲食店は殆どない。公共土木係の職員は家に帰って食事を取っていたが、北九州メンバーは残業前の休憩時間10分～15分程度を食事の時間にとらせてもらった。

庁舎の近くにはコンビニや弁当屋も無く、そうなるとカップラーメンを食べる時間しかない。北九州から大量に送っていただいたカップラーメンが非常に助かった。しかし毎日カップラーメンでは健康面が大変心配である。北九州メンバーで話し合い、事前に弁当や食料の買い出しを行うなどの対応を行った。

うきは市に行った9月初旬はまだ残暑厳しく暑かったが、内陸のせいなのか季節が急に変わったかのように朝晩冷え込むようになってきた。災害対策室の空調も微調整が出来ないのか室温の温度差が激しく、服を脱いだり着たりを繰り返し体温調節を行っていた。

自分の宿舎のアパートは、1階の角部屋で冬はとても寒くて底冷えがしていたため体を冷やさぬよう心がけていた。健康管理のお陰で支援期間中は体調を崩すことなく業務を終える事が出来た。

しかし、うきは市での業務を終え所属に帰ってきたところ自分の仕事の一部が予定していた時期に終わってなく、大幅に遅れた仕事を取り戻すため、残業の毎日となった。

このため、うきは市での激務に加え所属での業務（残業）により体調を崩してしまった。

〔 所属の支援 〕

9月から12月までの間、4次査定から9次査定の6回査定を受け、改めて災害査定業務の勉強させていただきました。

支援期間中、自分の所属の業務を受け持ってくれた職員の方々、各所属からうきは市まで激励に来ていただき、また食事面で大変苦慮していたこともあり栄養ドリンクや栄養補助食品等の沢山の食料品を送っていただき大変感謝しています。ありがとうございました。

うきは市を含め九州北部豪雨等に係る被災市の復旧復興には、かなり長い年月を要します。継続的な支援を願います。

九州北部豪雨による災害復旧事業支援活動

派遣先	うきは市住環境建設課災害復旧対策室
所属	建設局河川整備課
氏名	瀬戸嶋 誠
活動期間	平成 24 年 9 月 10 日～平成 24 年 12 月 31 日
支援活動	災害査定

1. はじめに

平成 24 年 7 月 11 日から 14 日にかけて、九州北部を中心に豪雨となり、各地で観測史上最大の降雨量を観測した。この豪雨により、建物の損壊、土砂災害、浸水のほか、公共施設被害が発生した。また、多くの避難者のほか、死者・行方不明者もあり、その被害は甚大となった。

そこで、九州北部豪雨により甚大な被害を受けた被災地に対する人的支援を行うため、福岡県市長会から派遣要請があり、これを受け、9 月 11 日から 3 月末まで、土木技術職員の派遣が決定された。計 8 名の派遣職員が前期、後期各 4 名、2 期に分かれ、道路、河川、橋梁等の公共施設被害を受けた災害復旧事業に携わることとなった。私が所属する河川整備課は 2 名の職員がうきは市へ派遣されることになった。

私は過去に災害復旧事業を経験した経緯があったことと、私が故郷である被災地の早期、復旧・復興を成し遂げる一員になるために、北九州市の代表として職務を全うする気持ちで、うきは市へ行くことを決意した。

2. うきは市の被害状況

うきは市においては、死者 1 名、重傷者 1 名、床上浸水 74 棟、床下浸水 370 棟、道路損壊 27 箇所、市道損壊 115 箇所、橋梁流失 3 箇所、河川溢水 5 箇所、河川決壊 3 箇所、市営河川損壊 276 箇所、がけ崩れ 18 箇所と甚大な被害が発生した。

3. 活動報告

◆被災状況、被災現場を見て感じたこと

うきは市に到着して、まず、災害対策室が設置されているうきは市役所を訪問し、市長をはじめとした、うきは市関係者への挨拶を行った。事前に被害状況を聞いていたが、うきは市役所がある市街地は、大きな被災箇所がなく災害で甚大な被害を受けた市とは感じられなかった。

しかし、その後、うきは市職員の案内で被害の大きかった地区へ向かうと状況は一変した。ある程度予想はしていたが、道路は破損し通行止めになっていたり、河川は護岸が崩壊し、全く原型が判らなくなっていたり、山肌は土砂が流出して家屋を押しつぶして避難生活を余儀なくされていた。

被災して 2 ヶ月も経過しているにもかかわらず、発生した当時のままであり、被災状況を見て、ただ

事ではないことを初めて実感した。



【土砂災害で家屋被害があった箇所】



【河川増水して避難途中で亡くなられた家】



【河川増水して橋梁が落橋した箇所】



【河川増水して床上浸水した家】

◆うきは市の体制

うきは市では被災を受け、公共土木係は課長補佐1名、係長1名、職員4名、嘱託3名の計9名体制から、他の課より1名、うきは市OB1名、久留米市OB1名、北九州市4名、防災エキスパート1名の計17名の体制に増員された。後に北九州市1名、糸島市1名、福岡県嘱託1名が追加となり計20名の体制となった。

◆活動内容

うきは市での主な作業は、災害復旧に必要な国からの補助金の額を決定するための一連の作業であった。具体的には、①災害査定を行うための『査定設計書』を作成する、②被災した道路、河

川、橋梁等について『査定設計書』で算出した申請額が、妥当性、経済性、構造物の安定性を保てているのについて、2週間毎、国土交通省の査定官及び福岡財務支局の立会官に査定を受ける、というものであった。

うきは市職員は災害復旧の経験が少なく、災害復旧の手順、申請等が不慣れな事もあって、災害の早期復旧・復興が遅れている様に見える。また、査定設計者の図面と数量計算書を作成する設計コンサルタントも、不慣れな災害復旧の特殊性に戸惑いを感じているようで、作業の進捗は設計コンサルタント毎でバラつきがあった。

うきは市の公共土木施設災害の箇所数と査定決定額は、合計 191 箇所(11 次査定 1,808,671 千円)、内訳は河川災 82 箇所 (1,231,265 千円)、道路災 105 箇所 (513,321 千円)、橋梁災 4 箇所 (64,085 千円) となり、被災箇所数と査定額の多さに今回の災害が甚大であった事を改めて実感した。



【災害査定風景 (7次査定 11月20日)】

◆うきは市着任前のうきは市職員の状況

災害当時の公共土木係は、現場には出ることができず、電話対応や業者手配を行っていた。他の男性職員は、住民からの通報があった現場対応と、必要物資の配給や消防団と一緒に土のう作りや現場での土のう積み、ブルーシート張りを行っていた。女性職員は、炊き出しや窓口対応等を行っていた。職員は交代で仮眠を取るなど行い対応に追われていたため、明らかに災害復旧を行うマンパワーが足りてないと感じられた。

当時の事を振り返って不足していた事は、現場での対応と報告をするための通信機械(防水機能)と防災用品の備蓄である。特に土のう袋、ブルーシート、大型土のう袋が不足していた。また、被害箇所数が多かったため現場に向かうための公用車が不足していた事が職員からの聞き取りで分かった。上記については、本市においても大規模災害に遭遇した際の参考にしないといけない。

4. 活動の中で感じたこと

うきは市では、大雨で河川が増水し避難途中で亡くなられた方がいたが、災害時の避難勧告等の適切なタイミングと避難勧告等の住民への伝達方法の難しさを実感した。また、近年、大規模災害が続いているが、北九州市においても大規模災害時への準備、備蓄、マニュアル等を整える重要性と、災害復旧事業の経験者を育てる仕組みと継承していく必要性を実感した。

うきは市での派遣を終え感じたことは、継続して支援をすることの大切さである。被災地の方が元の生活を取り戻すには、支援を継続していくことの重要性を感じた。また、職員の方は休日を返上し、甚大な被害を受け、混乱の中、支援者の受け入れ体制、仕事の割り振り、災害査定に必要な地権者の同意書の作成、現地査定に必要な査定杭、周辺の草刈等の査定を円滑に行うよう準備をしていた。このような、復旧・復興に対して取り組む姿を目の当たりにして、見が引き締まる思いがした。このような機会を与えていただきました関係者皆様に感謝の気持ちで一杯でお礼を申し上げます。

うきは市災害復興に参加して

派遣先	うきは市住環境建設課災害復旧対策室
所属	建設局道路計画課
氏名	國武 亮
活動期間	平成 24 年 9 月 10 日～平成 24 年 12 月 31 日
支援活動	災害査定

『災害派遣前』

私が災害派遣の話をもらったのは、9月初めでした。

主な仕事は災害査定業務とのことでした。私自身災害査定は、農林課在籍中に農林災害の災害査定を受検しましたが、大災害の災害査定の業務量がどの程度のものなのか全くわからず非常に不安でした。また、うきは市の情報が全く無く、インターネットでうきは市のホームページ等から被災具合を調べても全く全容がつかめなかったことも、不安を増大させました。

そうこうする内に、9月10日からうきは市に派遣されることが決定し、派遣期間は12月31日までの約4ヶ月間と自分にとっては長い期間となりました。

『うきは市に着任』



9月10日、朝倉インターチェンジを降り、うきは市役所に行くまでの間、朝倉市やうきは市の街中を通ったのですが、全くと言っていいほど被災した箇所が見られず、内心あんまり被災してないのではないかと思った記憶があります。市役所に到着して、市長から被災の全容を説明していただき、街中はほとんど被災していないが、耳

納連山の中は道路も川も田畑も被災規模の大小はあるけれど、何百箇所も被災しているとのことでした。しかしそんな災害を経験したことがなかったこともあり全くピンときませんでした。



昼、うきは市の職員に案内されて被災箇所に行き、田んぼの上に、川からあふれた水がびっくりするような巨石を運び込んでいたり、そこが田んぼなのか川なのか、また、川ならもともとどういう風に水が流れていたのか見当がつかない状況などを目の当たりにした時、初めて被災の甚大さがわかったのと同時に、これからこの全ての災害査定を受検するのかなと思うと気が遠くなったことを覚えています。

『災害査定』

翌日より、早速災害査定設計書を作成する業務に取り掛かりました。

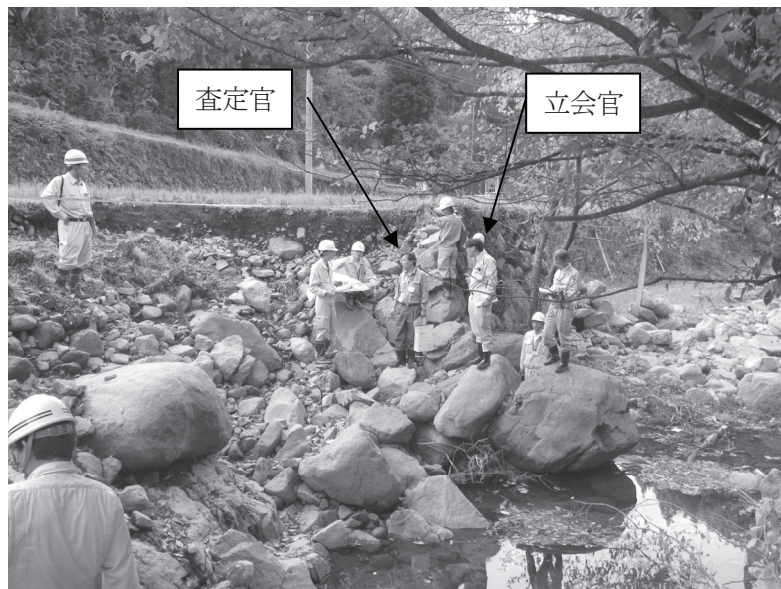
災害査定はいつまでに何を提出する必要があるのかがあらかじめ決められており、査定日が決定すると、2週間前までに目論見書という査定金額を県に報告する必要があります。

その後1週間前までに、野帳と呼ばれる、復旧概要と図面を整理したものをやはり県に提出する必要があります。そして前日までは、災害査定設計書（積算書と災害復旧図面、数量計算書）を作成して、当日の災害査定を受けることとなります。

最初の設計書作成は、ひとつひとつ根拠を調べながらの手探り状態で始めたので、とても時間がかかり、全然はかどりませんでした。提出物の期限が決めているので、気がかりが焦ってしまい、積算書の修正がたくさん出てくるというお粗末なものでした。どんな小さな間違いでも災害復旧に必要な補助金に直結して、復旧工事を発注するときにはうきは市に迷惑がかかるので、スピードと正確さの両方が必要だということを再確認しました。

そしていよいよ派遣後の最初の査定当日、かなり緊張しました。査定には国土交通省から来ている査定官と財務省から来る立会官の2人体制で行なわれます。また査定には2種類あって、現地には行かずに図面、写真等で査定を行う“机上査定”と、現地に行き実際に被災状況を見て査定する“現地査定”があります。机上査定の難しい所は、被災の状況を判断する材料が写真しかないので、いかに迫力のある被災写真が撮れるかにかかっています。時々、そういった写真が撮れて無くてばたばた撮

り直しに行ったりしました。机上査定は写真が命です。現地査定になると、被災の説明はし易くなりますが、ずっと川の中のごろごろした不安定な石の上を歩きながら査定を受けるので、査定が終わった頃にはヘトヘトになります。しかし、査定が終わったからといって作業が終わりではなく、それから



ら指摘箇所の修正を行い、それが終わるとその日の内か遅くとも次の日の朝には、県土整備事務所に査定設計書のチェックをしてもらい、金曜日の午前中までには、査定官に認められた補助金額を査定設計書に書き込んでもらう必要があります。これを朱入れと言っています。ここまでの作業を1週間でこなす必要があり、慣れるまで

は査定の日が来るたびに、非常に気が重かったです。ただ、慣れるとさほど気の重さは感じなくなりましたが、緊張感はずっとありました。

良い思い出なのかどうか別として、たまに設計書や図面の修正に時間がかかり徹夜することが何度もあり、次の日は眠くて眠くて仕方がなかったです。こんな業務を年末までずっと繰り返して行っていました。みんなが力を合わせて頑張っていたので、充実したものとなりました。

『さいごに』

長いと思っていた派遣期間でしたが、いざ派遣されるとあっという間に時間が過ぎ、最終日を迎えた感じもあり、やっと最終日になったような感じもありました。

ただ、このうきは市に災害派遣に来て失敗したなどは一度も思いませんでしたし、ある程度自分たちに課せられた仕事は出来たと思っています。ここに来て強く思ったことは、派遣メンバーの中に、絶対1人は災害査定に詳しい人が必要だということを感じました。

心残りなこととしては、派遣されている間のほとんど全ての時間は、災害査定業務にしか関われなく、実際被災箇所の復旧に手を付けられなかったことです。

これからは、うきは市のみなさんが中心となり、美しいうきは市を復興させられるように強く願っています。またいつか見事に復興したうきは市を見に行こうと思います。

これで派遣の報告とさせていただきます。

うきは市災害派遣を通して

派遣先	うきは市住環境建設課災害復旧対策室
所属	上下水道局下水道整備課
氏名	深川 弘明
活動期間	平成 24 年 9 月 10 日～平成 24 年 12 月 31 日
支援活動	災害査定

1. はじめに

2012 年 7 月の九州北部豪雨災害により甚大な被害を受けたうきは市からの支援要請を受け、被害発生から約 2 ヶ月後の 9 月 10 日から、同じく北九州市からの派遣職員 3 名(藤丸氏、國武氏、瀬戸嶋氏)と共に災害査定業務を行うことになった。

2. 被災状況

赴任初日の朝、うきは市役所へ向かう道中（うきは市の平野部）においてはほとんど被害が見受けられず、事前に聞いていた話とは全然違うなと思っていたが、そんな思いはその後消え去った。うきは市職員から被災現場は主に山間部であるという事を聞き、被災現場数箇所に来てもらったが、河川は大きく崩壊し、上流側から流れてきたと思われる大きな石や木々により、被災前の景色の面影は無くなっていた。

河川の氾濫により家や倉庫が流された箇所や、河岸が洗掘された事により落橋した橋梁など数箇所の現場を見て回ったが、被災から 2 ヶ月が経った当時でも、ほとんどの被災現場が手付かずの状態であった。





3. 業務について

1) 災害復旧事業制度

私達が今回派遣で行う業務となる『災害復旧事業制度』とは、一定の基準を満たした異常気象が発生し、公共土木施設（河川、道路）が一定規模以上に被災した場合、国に対して公共土木施設の被害報告を提出し、復旧に要する費用を算定の上で国に負担金の請求を行うことができる制度である。

2) 査定

災害復旧工事の設計が派遣職員の主な業務であったが、約2～3週間おきにやって来る書類の締切りに追われる毎日だった。

査定を受けた際、査定官からの指摘により書類の修正が必要となるが、基本的にその修正はその日のうちにやってしまう必要があり、夜中の2～3時まで残って修正する事も珍しくなかった。修正に手間が掛かった時などは、翌朝の5時過ぎまで修正の作業をしていた事もあった。

3) 活動の中で感じたこと

査定設計書を作成したり、査定を受けるなかで感じたのは、「災害査定業務」の経験よりも「道路や河川の設計や監督業務」の経験がある人の方が戦力になるのではないかということ。

もちろん、両方の経験があるに越したことは無いが、災害査定業務の方については、仮に経験した事の無い人間でも何とかこなす事が出来るのではないかと思う。

しかし、設計書の作成や査定を受ける時、道路や河川の知識やノウハウの有無では大きく差が出てくるという事を、未経験者の私は身をもって実感した。

ごく一般的な設計であれば、基準等に沿って設計すればいいが、まずそういった現場は無く、幾度となく先輩方の作業を止めて教えてもらったし、査定中の査定官からの質問にも、うわべだけの私の知識では答えられるものに限界があり、ここでも先輩方のフォローに非常に助けられた。

4. 最終日

平成 24 年 12 月 28 日、うきは市長から派遣の任を解く辞令を受け、あわせて感謝状とお礼の品を頂戴した。



ここまでして頂くほど、私がうきは市の復興に貢献できたのか正直なところ分からない。が、これからうきは市が復興していくためのお手伝いは出来たのではないかと考えている。

◆最後に…

今回の派遣では、非常に貴重な経験をすることができました。

派遣期間中、多大なるご支援を頂きました関係者の皆様、ありがとうございました。

そして、そう遠くない将来にうきは市が復興できる事を祈念して、被災地支援活動の報告とさせていただきます。

九州北部豪雨被災地支援活動に参加して

派遣先	うきは市住環境建設課災害復旧対策室
所属	上下水道局東部工事事務所
氏名	中島 博文
活動期間	平成 24 年 11 月 12 日～平成 25 年 3 月 31 日
支援活動	災害査定

九州北部豪雨から約4ヶ月経過した、11月2日にうきは市の災害復旧支援に行かないかと話があり、北九州市で災害復旧の経験がない私で大丈夫か悩んだが、地元に近い市の復旧支援のお役に立てればと決意した。

事前の情報は、ニュースで見たことだけで職場の引き継ぎ、災害査定の講習を受け11月12日に不安の中、うきは市に入った。



7/3～7/5,7/11～7/17の集中豪雨

うきは市内に入ると市内は普通で何処に被災があったのかわからなかったが、市役所の災害対策室はうきは市職員10名、北九州市先発隊の4名で公共土木災害(約400箇所)、うきは市職員9名、県土木・福岡市3名で農林土木災害(約600箇所)を対応し、誰もが7月からの疲れか会話もない状態だった。

現地確認のため、山間部に行くにつれ見えてくる被災の爪痕は、舗装がなく通行止めとなった道路、田畑との境界がわからないほど壊れた河川護岸、風光明媚な景観であったろう棚田が無残にも流された箇所など衝撃的だった。





【うきは市つづら地区被災状況】

●現地での業務活動

その中に入っの業務は、2週間に一度受ける災害査定の現地視察補助。災害査定官からの指示や指摘があった箇所の図面及び設計書の修正を、査定官滞在中に処理し、朱入れ・検算を受け事業費を確定する作業を、私は8次査定から最後の11次査定まで時には深夜まで対応した。

平行して、査定決定箇所の復旧工事発注をするため、朱入れ査定設計書と実施設計書との相違がないか、被災箇所の再確認、県土整備事務所との実施協議等を行い工事発注するのだが、11、12、1月はとにかく災害査定と準備に追われ、準備できた箇所から復旧工事を行った。

【申請写真撮影状況】



【査定官による実施査定】

●支援活動を通じて

今回うきは市での派遣活動に参加して、やはり、復興を1日でも早く進めることは市民サービスに繋がり、そのためには、職員が災害査定の実験を積み、迅速な対応を取ることが一番ではないかと強く感じた。

最後に、うきは市の復興が進み、青々とした棚田の情景がまた見られることをお祈りして、活動の報告とさせていただきます。



うきは市への災害復旧事業支援の派遣を

派遣先	うきは市住環境建設課災害復旧対策室
所属	建設局道路部街路課
氏名	石井 学
活動期間	平成 25 年 1 月 1 日～平成 25 年 3 月 31 日
支援活動	公共土木施設災害復旧業務支援

今回のうきは市への派遣は、平成 24 年 7 月の九州北部豪雨により被災した市への復興支援として、地方自治法第 252 条の 17 の規程に基づき、平成 24 年 9 月中旬から翌年 3 月末までの約 6 ヶ月間、前期、後期の 2 班に分けて行われた。自分は後期派遣の一員として、25 年 1 月から 3 月末までの期間を担当することとなった。

(担当業務)

当初の予定では、同市に派遣されていた先発隊が被災した公共土木施設の全箇所 の災害査定を終了させ、その後の復旧工事発注のための設計業務が自分達後発隊の担当業務ということであったが、先発隊の派遣期間内に全ての災害査定が終了しなかったため、最後の災害査定も担当することとなった。

うきは市の当初の計画では、先ずは 12 月末までに国の災害査定を終了し、1 月から工事発注のための設計を行い、順次、復旧工事を進める予定となっていた。

しかし、うきは市の被害は激甚災害の指定を受けるほど大規模であったため、土木担当職員、設計コンサルタントの不足などの理由から、査定設計書の作成が予定通りには進まず、年明けの 1 月に第 10 次、11 次と 2 回の災害査定を残す結果となっていた。

うきは市の公共土木施設災害の概要

被災原因	平成 24 年 7 月 11 日から 7 月 17 日にかけての梅雨前線豪雨		
	申請箇所数 (箇所)	査定決定額 (百万円)	
被災施設	河川	82	1,231
	道路	105	513
	橋梁	4	64
	計	191	1,808

(活動の経過)

うきは市への赴任は、正月明けの 1 月 4 日の金曜日からであったが、国の第 10 次災害査定は週明けの月曜日からとなっていたため、申請内容、現場状況の把握も中途半端なまま災害査定受検の補助業務を行なった。このような事前準備の不足とうきはの地理に不慣れなことも重なり、当日の査定現場の移動では、一時、道に迷うハプニングなどもあった。



【災害査定補助：査定官・立会官への申請内容の説明状況】

次に担当した業務は、先発隊から引き継いだ第11次災害査定箇所の受検であった。

自分が担当となった現場は、橋梁全体が流失した箇所の橋梁復旧であったが、査定申請用の設計図書は既に前任により作成済みであったため、申請時に添付する申請写真の準備と受検に向けた申請内容のチェックを行った。

申請写真の準備では、みぞれ交じりの悪天候の中、うきは市職員と北九州市、糸島市からの派遣職員が現場作業員となり、協力して各担当箇所の写真撮影を行った。



【申請写真の撮影：申請（被災）範囲、前後施設の検測状況】

11次災害査定により全ての災害査定が終了した後、次に担当する業務は、工事発注のための設計業務である。

実施設計のためには現場状況の把握が不可欠なため、地元うきは市職員の案内のもと、査定決定図書を手にして現地地盤の高低差などの地形、現場障害物の状況や背後地の利用状況などの現地調査を行った。



【現地調査状況】

その他にも、復旧工事の実施に向けた統一基準の検討、発注計画に関する会議にも加わり、北九州市で災害復旧事業に従事した経験を生かした提案もすることができた。

総額約18億円の災害復旧事業を3年間で行うことになったが、この年次割をどのようにするかが議論になった際、「国庫負担法による公共土木施設災害復旧事業では、被災年度を含めて3年以内という取り決めがある。被災後3年目に工事に着手していない箇所がある場合、再度、国の再調査を受ける必要がある。被災施設の早期復旧を図るとともに、不測の事態による再査定を避けるための考慮が必要である。」と提案した。

その結果、初年度2.5億円、次年度13億円、最終年度2.5億円の発注計画の年次割となった。

その後、設計コンサルタントから順次提出されてくる設計図書のチェックを行い、修正等の指導を行いながら、順次、工事発注のための設計業務を進めている。



【執務室：設計業務の状況】

（困難を感じたこと）

工事発注の設計では、現地の地形等を理解したうえで機材の搬入経路や重機の規格等を決定するため、現地の状況把握は大変重要である。

今回、現地調査で分かったことは、被害の多数を山間部の溪流河川が占めており、被災箇所の近くには道路がない場合や、道路がある場合でも道路と復旧現場との高低差が5m、10mという箇所が数多くあり、重機の規格を検討する以前にどこから機材を搬入するべきか見当がつかず、対応に苦慮している状況である。

（改善すべき点）

災害復旧事業の査定設計は、数種類の工種・作業をセットにした災害復旧独特の単価“総合単価”を使用して作成される。そのため、工事を実際に発注する実施設計としてそのまま使用することは

きない。

そこで、工事の発注に際して数量計算等の見直しが必要となるが、うきは市では査定設計と工事発注のための実施設計は同一コンサルタントが行うこととしているため、ここでも設計コンサルタントの不足から作業が思うように進んでいない状況である。

今回の災害復旧の設計業務は16社の設計コンサルタントに委託しており、1社の受け持ち件数は多いところで39件と多く、2週間おきに来る災害査定の終了と同時に、工事発注のための実施設計を提出することは困難であり、査定終了後に数量計算等の見直しに相当の時間を要している。

これは、うきは市自体の災害件数の多さもさることながら、九州北部豪雨による災害の発生が広範囲にわたり、うきは市の設計を担当する設計コンサルタントが県や近隣市町村の災害復旧にも関わっている事も作業の遅れの理由となっている。

このような問題を減らすためには、コンサルタント各社の受け持ち件数を減らすことが必要であり、激甚災害などの非常時には、設計コンサルタントについても災害の発生していない地区からの応援体制の整備が重要になると感じた。

(印象に残ったこと)

うきは市へ赴任して一番印象に残ったことは、九州北部豪雨による被害箇所の映像はニュース画面などで見ていたが、被災現場を直接目にして、激甚災害の指定を受ける被害がどれほど激しいものか、本当に理解することができたことである。

また、北九州市でも単発的な災害は発生しているが、被災施設はある程度原形をとどめているため、従前施設の状況が想像できないほど壊れたうきは市の被害状況は、門司の昭和28年の水害写真を思い出し、同時に近年の局地的集中豪雨がいたる所で起きている状況も頭をよぎり、いつ北九州市で同様の災害が発生しないかと不安になった。

(北九州市の防災に必要なこと)

今回のうきは市への派遣で担当した災害復旧事業は、申請手続き、設計書の作成方法、災害査定など独特の決まりごとが多く、経験のない者には分かりづらいことを再認識した。

そのため、何時何処で起こるか分からない地震や局地的集中豪雨、それに伴い起こる大規模な災害の復旧に備え、北九州市でも災害復旧事業の実務経験者を絶やさないう、毎年少しでも災害復旧事業を実施し続ける事が大切だと感じた。

日ごろから災害に備えよう

派遣先	うきは市住環境建設課災害復旧対策室
所属	建設局河川整備課
氏名	内村 政彦
活動期間	平成 25 年 1 月 1 日～平成 25 年 3 月 31 日
支援活動	公共土木施設災害復旧業務支援

平成 24 年 7 月 14 日、パソコンのレーダー画面は九州北部を赤い雲が覆っている。例のテーパリングクラウド（にんじん雲）梅雨末期に九州を襲う謎の積乱雲だ。

熊本県北部、福岡県南部に集中的に豪雨が降っている。北九州市でも水防監視体制が発令され、水防監視員が現場に張り付いた。今のところ、北九州付近には、強い雨雲は見受けられないが、前線が上がって来れば予断は許されない。

熊本県阿蘇市阿蘇乙姫では総雨量 816 mm にも達している。大変なことになる予感がした。

筑後川、矢部川の水位情報を見ると氾濫危険水位を超えてしまっていた。テレビのニュースでは「今までに経験したことのない大雨」と聞きなれない言葉で表現し、矢部川が決壊している状況を映し出している。夜半に、北九州市は、水防監視体制を解除したが、県南は大変なことになると思いながら一夜をデスクで明かした。

朝のニュースは、災害の模様を伝えていた。死者が 26 人、負傷者数十名、寸断された道路、倒壊した家屋、濁流に押し流されそうになっている住民の画像。

国土交通省による、TEC-FORCE の派遣や羽田国土大臣の視察が行われると言っている。

大変な自然災害がまた起こってしまった。

秋風が立つころ、災害復旧の応援依頼がうきは市、八女市から来ていることが、分かった。

何となく、声がかかるような気がしたので、事前に妻に話しておいたが、新潟中越地震の時も空振りだったので、年齢の高い職員は呼ばれないよと一笑された。一応、単身赴任しても良いか確認しておいた。

翌日、うきは市へ行けるかと聞かれ、「はい」と答えた。

ただし、半年となると、仕事や家庭に負担をかけるので、前半と後半チームに分けて 3 か月交代で赴任する事で話がまとまり、後半に行くことになった。

平成 24 年の師走も押し迫ったころ、引継ぎも兼ねて、うきは市に事前準備に行った。

日にちがち、モチベーションが下がっていたので、年明けからの赴任に喝が入った。

でも、底冷えがする。被災現場は薄氷が張っている。宿舎もエヤコンだけでは寒すぎる。

年末、慌てて暖房器具やヒートテック等の衣服を準備することにした。

正月気分が醒めない1月3日、うきは市が用意している宿舎に到着。

部屋を整え、一緒に赴任する4人が夕方にはそろったので、正月料理の残りで決起した。

4日、うきは市長から辞令をいただき、関係職場に赴任のあいさつ回りをを行う、緊張の朝だった。

午後は、週明けの月曜日から行われる、災害査定の現場を見て回ったが、地理不案内でどこに行っているのかまったく分からない、とにかく地理を覚える事にした。

第10次査定が7日に始まる、査定官の細かなカットが入る。その日は夜遅くまで、図面や数量の修正に追われた。翌日、無事に朱入れ（国の査定官から、査定決定金額を朱書きの筆で書いてもらうこと）が完了した。

これまで、先発チームはそうとう頑張ってきたのやなと思うと、頭が下がった。

1月末に最後の第11次査定を受けるために、後発チームも頑張っており、査定当日を迎えた。

今回の査定は、大きな修正が無くてよかったが、北九州市で経験してきた災害査定と違って、福岡県との調整が面倒で、政令市は県と対等に査定が受けられることに、改めて政令市の有難みが分かった。

24年災害復旧工事設計書		うきは市	
課長	課長補佐	係長	設計者
災害年月日	平成24年7月11日～17日	職掌	主任
工事番号	第644号	職掌	主任
計画名称	福岡県 福岡市 東区 東山橋	職掌	主任
施行位置	福岡県 福岡市 東区 東山橋	職掌	主任
工事名称	福岡県 福岡市 東区 東山橋	職掌	主任
工事費	14,574千円	職掌	主任
内訳		職掌	主任
内訳		職掌	主任
被災原因	平成24年7月11日～7月17日までの福岡県福岡市東区による異常出水。(異常気象コード12270)	職掌	主任
その他		職掌	主任

【朱入れがされた査定設計書】

災害査定は現地での杭打ち、測量、被災水位の証明写真、被災状況写真撮影の準備から、査定図面と査定設計書の作成を、被災した日から2か月の短期間に行うため、時間がなく大変である。

今回は激甚災害に指定され、査定日程については随分緩和され、年末までの予定で進められていたが、結局は、年明けの1月末迄にずれ込んでしまった。

右の写真は、うきは市災害対策室の職員と福岡県、糸島市、北九州市から派遣された職員で、被災現場の状況写真を撮影したときに、濁流に流された橋梁床版に、皆で乗っているところである。

夜のコミュニケーションを図った御蔭で、短期間にチームワークが良くなっていた。



35年間、北九州市で勤めてきて、初めて他市に勤務することが出来、よい経験となった。

北九州市ではあたり前のように行ってきたことが、うきは市ではご法度だったりした。

逆の事だが、朝のラジオ体操は、非常に良かった。身体にスイッチを入れ仕事が順調に進むし、健康のために毎日続けた。

我々、派遣職員が元気を出して体操したので、うきは市や他市の愛好者も増えたような気がする。

北九州に帰っても、続けられたら良いが。



【3月3日 つづら棚田】

うきは市は棚田百選で有名な町である。

山の斜面に猫の額ほどの田んぼが続くつづら棚田周辺に、「うきは市伝統的建造物群保存地区」がある。地元住民と行政のお互いの協力により、自然と風土並びに生活文化が創り上げた歴史的風致を、市民共有の財産として保存し活用することにより、地元住民の生活環境の質と向上や、うきは市の歴史的文化的環境の維持に努めるように条例を定めている。

そのような場所が、被災して災害復旧を行うとなると、伝統的で多自然工法である、石積み工法を採用することになる。

北九州市で、紫川をはじめとする多自然型川づくりに長い間携わり、河川工事共通仕様書や出来形管理基準を作成していたのが役に立ちそうだ。

4月からは、次の派遣職員により、設計監督が行われるが、北九州の基準をうきは市版に作り変えた仕様書に基づき、安全で美しい災害復旧を行ってほしい。

災害は忘れたころにやって来る。

地球的規模の異常気象で、いつ何時大雨が、北九州市を襲うか分からない。

非常事態に行政職員がどのように対処し、住民の安全を守るか、常に訓練していなければ、後手に廻ってしまう。

うきは市の職員の方も日頃から災害に対して備えがあれば良かったと言われた。

災害復旧は初期対応が大事である。しかしながら、災害復旧のベテラン職員を常時抱えておくことは、北九州市の体制からはなかなか困難であるが、河川整備課が毎年行っている職員向けの災害講習会に加えて、採択を受けられるような自然現象が発生すれば、現場状況を判断し、1件でも良いから、災害査定申請を行うよう進言したいと思った。

僅かな人数かもしれないが、災害時の対応や災害申請の方法が学べ、人材育成につながる。

赴任して、あっという間に2か月が経過した、思うように仕事ははかどらない、イライラが募る。委託したコンサルタントから、予定どおりに成果品があがってこない。

やり残した仕事や、やりたい仕事を残したまま、この地を去ることは心苦しいが、北九州の地からうきは市の災害復旧が早期に完成して、無事に成功認定が終わるよう応援していこう。

また、うきは市の皆さん、糸島市や県から派遣された皆さんの心遣いで、気持ちよく生活や仕事ができ、有り難かった。

派遣の実績を自分の目で確かめたいので、復旧が完了する二年後に、再度うきは市を訪れてみたい。

人々の絆

派遣先	うきは市住環境建設課災害復旧対策室
所属	建設局水環境課
氏名	岡本 実
活動期間	平成 25 年 1 月 1 日～平成 25 年 3 月 31 日
支援活動	公共土木施設災害復旧業務支援

《災害発生時の自分（北九にて）》

梅雨の時期はいつも心配である。これは自分に限らず建設局職員他、災害対応に従事する職員ならばあたり前の話かもしれない。本市では平成 21、22 年と 2 年連続の豪雨に見舞われた経験を踏まえ、ソフト、ハード面から様々な対応を行ってきた。

災害発生時の 7 月 12 日、早朝から職場より連絡があり、直ちに職場に向かった。今年度から組織改正により水防体制が変わったことによる不安はあったが、職員一同の努力による十分な事前準備の甲斐もあって、なんとか軽微な影響で乗りきることができた。

しかし、水防業務に従事している際には X バンドレーダーなどにより、気象情報などを随時チェックするが、その時やはり気になったのが福岡県南部と熊本、大分における雨の状況であった。X バンドレーダーでは強い雨を示す赤い色が長時間確認され、かなりの降雨があることが判った。また、帰宅してテレビのニュース映像などから、被災状況を見るにあたりその状況が未曾有の状態であり、被害にあわれた方々のことを思うと大変心が痛むものであった。

《自分にできること》

その後、テレビ、新聞等の報道を通じて次第に被害の状況が明らかになっていくとともに、改めて今回の災害の恐ろしさに驚くところであった。大変な状況においては、何とかしたいと思うのが人間である。そのうちに本市が災害発生時直後から、消防局救助隊と給水車を八女市に派遣し、さらに、県内で発生した災害廃棄物の受け入れを行うことを聞き、市民の立場からも少しホッとするところであった。

《派遣前・直後》

自分の部から派遣されるという話を聞いたのは、8 月末の事であった。第一陣が出発するのに比べ、1 月からの派遣との事なので少し気持ち的には余裕があったが、いざ派遣となると身が引き締まる思いであった。派遣前、事前準備のためにうきは市に来てその状況を確認して愕然とした。その状況は新聞、テレビで見るより真に迫るものであった。改めて災害の恐ろしさが身に沁みた。



【被災箇所一例】

派遣直後からさっそく査定の作業に取りかかった。災害対策室においてはうきは市の職員の方々をはじめ、農地災害のスタッフ等が同室し大変な熱意が伝わってきた。

同じく派遣された糸島市の職員を含めたみなさんと協力し、さっそく査定用の写真撮影などを行った。この作業は、現地の寸法などを含めた状況資料を作成するもので、複数の人間の協力があって初めて作成できるものである。こうした資料を含め短期間ではあったが、みなさんの協力もあり重要構造物である橋梁の査定設計書を作成することができた。

査定当日は、職員同士のミーティングを行うなど事前準備を十分にしていたつもりだが、本番になると緊張した。しかし査定に認められるよう頑張って説明した結果、無事現地査定での修正もなく担当箇所の査定が終了することができた。



【査定用写真撮影状況】



【現地査定状況】

《うきは市内を歩けば》

住まいの近隣には、伝統的建造物群保存地区（以下 伝建地区）に指定されている「白壁通り」という旧商家の通りがあり、美しい町並みで歩くと大変気持ちがいい。歩いているとうきは市内の学生は必ずと言っていいほど見ず知らずの自分に挨拶をしてくれる。これがまたうれしい。

また、付近で働いている人は北九州から派遣されて来たことを知っている人もいて、励ましの言葉

をかけて頂いたこともあり、そうした皆様方の言葉を頂く度につらいことがあっても頑張ろうという気持ちになった。

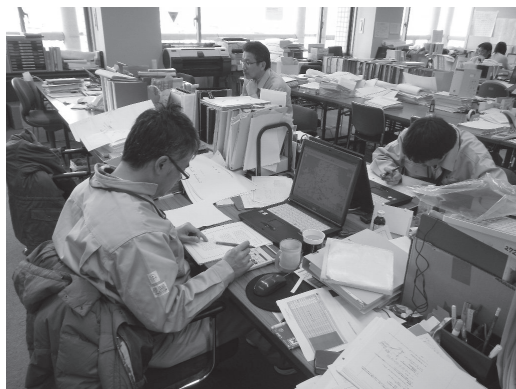
【伝統的建造物群保存地区 「白壁通り」】



《設計業務》

査定の作業も終わり、実施を行うにあたって、うきは市の職員やみなさんと情報交換を行い順次設計作業を行っている。これからの作業は量、質ともに難しい面もあるが、その都度会議を開くことや、設計内容についても疑義がある点などがあれば職員一同分け隔てなく知恵を出して作業を進めている。設計については、難しい構造計算、数量計算等を検討することも大変ではあるが、数字とにらめっこするだけでなく、地域の人たちの要望、思いを感じながら設計に反映させていくよう努力しているところである。

机上だけではわからず、調査のために現地に行くことも多いが、地元の方から声をかけられ、災害復旧の要望を直接聞くことも度々あった。地元の方は農業に従事されている方も多く、特に被災により農業に支障が出ているため早期の復旧を望まれている声が聞こえる。こうした方々の要望もわれわれには大変丁寧な話ぶりでお話をされ、事情が大変な中で大変頭が下がる思いであった。



【災害対策室内執務状況】



【現地における地元の方との対話】

被災された地域においては、この災害を記憶にとどめるよう公民館には写真のような看板が設定してある。地元の復興に関する思いと、願いがひしひしと伝わってくる。



【公民館前の看板】

また、復旧箇所は先の「白壁通り」と並んで伝建地区に指定されている景観豊かな昔ながらの茅葺（かやぶき）主屋が立ち並ぶ区域があり、こうした区域の復旧にも教育委員会（伝建地区に関する行政委員会）との協議を行いつつ景観などに関して地元で配慮した復旧を進めているところである。

【伝統的建造物群保存地区 うきは市新川田籠地区】



《人々の絆》

現在自分は、北九州市と異なる地域で仕事をしているが、地域、市民のためになることは公務員冥利につきると感じている。こうした経験を今は離れて暮らしているが、いつかはバトンタッチする子供たちに話してやりたいと考えている。

今回の災害により受けた被害は大きいものの、うきは市の市民の方々、職員のみなさまの思いは大きく復興の原動力となっている。

今回は自分達がうきは市に派遣されたが、うきは市からも東日本大震災で派遣された職員もいる。また、糸島市からの派遣された職員の方々をはじめ、様々な人々のつながりがあり、目に見えないが、職員のみならず地域の人々を含め日本中のみんながいわば有機的な絆によってつながっているものと実感している。

これからもできうるかぎり復興に協力したい。そして今は、美しいうきは市の日でも早い復興を切に願っているところである。

うきは市支援活動報告

派遣先	うきは市住環境建設課災害復旧対策室
所属	上下水道局下水道整備課
氏名	鬼木 香尚
活動期間	平成 25 年 1 月 1 日～平成 25 年 3 月 31 日
支援活動	公共土木施設災害復旧業務支援

1. はじめに

平成 24 年 8 月、私の故郷である八女市を含む被災地への派遣の話を受けて、私は少し迷ったが、「故郷のために何かできることがある。」そんな思いで派遣に行くことを決心した。

しかし、手を挙げたものの、私はこれまで災害復旧の仕事に携わった経験がない。果たして被災市のお役に立てるのだろうかと不安だった。そんな思いの中、派遣先がうきは市と決まり、派遣職員は各 4 名ずつで先発隊と後発隊に分けられ、私は後発隊で平成 25 年 1 月から 3 月までの派遣となった。

(※ 1 1 月に 1 名、追加派遣)

派遣まで少し時間もあり、災害復旧業務について事前に勉強しようと考えていたが、日々の業務に追われ、十分な準備をする間もなく派遣の日を迎えた。

2. うきは市が受けた被害

うきは市は福岡県の南東部に位置し、地形的には、南に耳納連山を抱き、北に筑後川が流れている自然に恵まれた地域である。平坦部は肥沃な水田地帯が広がり、山麓部には果樹地帯が形成され、山間部は棚田などを含む森林となっている。

平成 24 年 7 月 3 日から 17 日にかけて、九州北部に梅雨前線が停滞し、各地で猛烈な雨をもたらした。耳納連山を源流とする河川の各所で水位が上昇して洪水が起き、主に山間部の河川護岸や田畑、道路、急傾斜地などの崩壊が数多く発生した。



3. 業務報告

うきは市での配属先は、河川や道路を管理する公共土木係であった。9月から災害査定が始まり、12月までに計9回の査定が完了している。後発隊は残り2回の災害査定を受けることとなった。

【災害査定】

災害査定とは、『公共土木施設災害復旧事業国庫負担法（負担法）』に基づき、国に対して復旧に必要な事業費を申請し、査定官（国土交通省）、立会官（財務省）、事務官（国土交通省）等により被災状況の確認が行われ、被災原因や復旧方法など、申請した内容が適正なものであるか審査を受けることである。



（災害査定の様子）

被災状況がよくわかるように写真を撮ることや被災原因を把握して適切な復旧工法を検討すること、査定官に被災概要を説明することなど、私にとってすべてがはじめての

経験だった。査定当日はかなりのプレッシャーを感じたが、うきは市職員のみなさんや先発隊を含む北九州市職員の仲間と一致団結して取り組み、無事に査定を受けることができた。

限られた時間の中で、災害査定の準備・受検を何度も行ってきたうきは市職員のみなさん、先発隊の北九州市職員のみなさんの労力はとても大変なものだったと痛感した。

1月25日にすべての災害査定が終了。次の業務は実施設計へと進む。

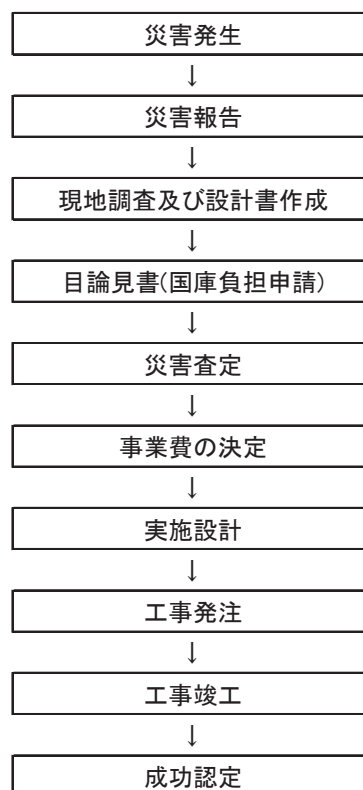
～災害査定結果～

■全体：405箇所

■決定額：26億9012万9千円

事業名	施設	箇所数	決定額
公共土木災害	河川	82	12億3126万5千円
	道路	105	5億1332万1千円
	橋梁	4	6408万5千円
	計	191	18億867万1千円
農業土木災害	農地	103	2億2721万9千円
	農業用施設	88	4億7353万3千円
	計	191	7億75万2千円
林道施設災害		23	1億8070万6千円

～災害復旧事業のながれ～



【実施設計】

実施設計を進めていくうえで最初に行ったのは、設計積算の考え方や設計図面の書き方の統一を図ることであった。うきは市では明確な基準がなかったため、北九州市で培った知識と経験・技術力をベースにみんなで議論を重ね、たたき台ではあるが統一した基準を作成した。

次に、施設の重要度や地元からの声を勘案して、公共土木災害（191箇所）の発注計画を定めた。それから、業務分担について、河川・道路をエリア毎に担当を決め、うきは市と北九州市両職員がペアとなって進めいくこととなった。以上、工事発注に取り組む体制が整う。

これらを踏まえたうきは市の復旧方針を各設計コンサルタント会社へ説明し、本格的な実施設計がスタートした。現在、数十箇所の復旧工事を発注し、一部では完了しているところもある。一歩ずつ、着実に復旧に向けて前進している。



（設計図面を基に現地を確認）

＜実施設計を進めて行く中で・・・＞

被災を受けた河川護岸の多くは道路に接しておらず、工事車両や重機をどう搬入するのか、どこに据えるのか、施工方法を考え込んでしまう。

それから、災害査定で決定した復旧方法が、現実的な施工と合わない部分がどうしても出てくる。事業費決定額を大きく超える箇所もあり、査定時との整合性を考えるに頭を悩ませた。

4. まとめ

今回、はじめて災害復旧の業務に携わり、被災のメカニズムを把握することや適正な復旧方法を検討すること、災害査定を受検することなどの対応がとても難しく、特殊な業務だなあと感じた。

やはり、突発的に発生する災害への適正かつ迅速な対応は、経験と技術力、さらには団結力が重要であるとする。

業務も無事に終わり、うきは市へ僅かながらお役に立つことができ、災害復旧の考え方や査定を受ける心構えを学べたことは、とても貴重な経験となった。うきは市で得た経験を今後の災害復旧に活かしていきたい。

